

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

市川市立下貝塚中学校

研究主題

学校研究主題 主体的に学び考える生徒の育成

～知識・技能の確かな習得とICTの効果的な活用を目指した各教科の授業づくり～

国語科研究主題 思いや考えを明確に伝える国語科の学習指導

1 学校の概要

本校は昭和54年に開校し、今年45年目を迎えた。市の北東部に位置する丘陵地帯と平地からなり、周辺には梨畑が点在している。560名の生徒たちは「笑顔かがやく学校」を合言葉に、日々明るい生活を送っている。

2 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

令和6年度全国学力・学習状況調査では、国語科において「書くこと」と「読むこと」に課題が見られた。特に「思考力、判断力、表現力等」の「読むこと」の領域で「目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる」問題、「知識及び技能」の「文の成分の順序や照応について理解しているかどうかをみる」問題、「表現の技法について理解しているかどうかをみる」問題において全国平均正答率を大きく下回った。また、本校全体の实態から、多様な資料を読んで情報を整理すること、それらから考えを得て文章にまとめることが苦手な生徒が多くいることが明らかとなっている。これらの課題を改善する学習づくりが必要となる。

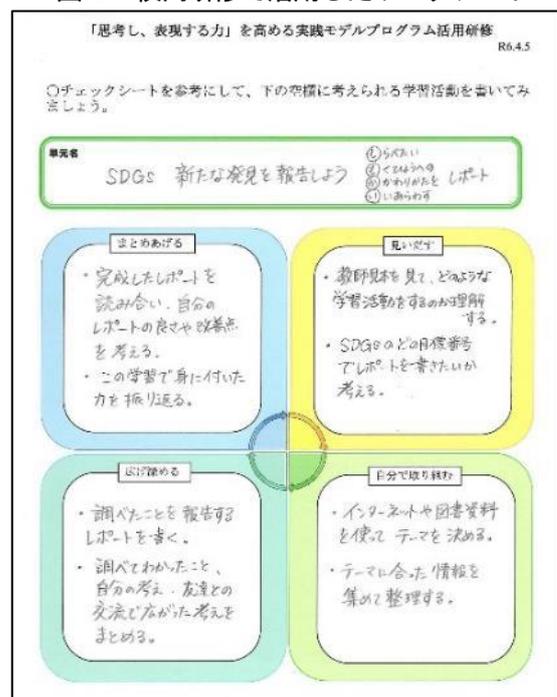
(2) 学力向上のための取組

『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムに沿った検証授業を目指して、以下の取組を行った。

ア 「授業づくり」に特化した校内研修会の実施

研究2年目となる令和6年度の1学期は、「授業づくり」に特化した校内研修会を実施した。4月に校内で『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムについての共通理解を図り、授業づくりの方法を確認した。ワークシートに四つの過程で行う学習活動を書き込み、どのような授業をしたいかのイメージをもった。(図1) 5月に職員の相互授業参観、6月に参観後の意見交流、7月にICT端末活用の研修を行った。9月からは各教科の授業研究と振り返りを進めた。

図1 校内研修で活用したワークシート



イ 国語科による検証授業の実践

- ・単元名：和歌の調べ—いにしへの心と言葉を味わおう—（3学年）
- ・学習材：伝え合う言葉 中学国語3「和歌の調べ—万葉集・古今和歌集・新古今和歌集—」
- ・単元計画：（全6時間扱い）

本単元は和歌を鑑賞する単元である。計画に際して『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム』の①見いだす、②自分で取り組む、③広げ深める、④まとめあげる、の4つの過程を意識した。

①「見いだす」の過程では、教師が作成した見本を示し、どのような活動を行うのか理解させた。和歌を鑑賞することを通して、当時の人のものの見方や考え方について読み、自分の考えを形成する学習であること、和歌の世界に親しむ学習であることを確認した。授業の中では、どのようにしたらこの学習ができるか、大まかな活動計画を考えさせた。この段階でのねらいは、和歌の内容を理解するだけでなく、その時代への理解が必要であることに気づかせることであった。図書資料やインターネットの情報を活用しながら、自分の知りたい和歌が詠まれた時代背景や人々の暮らしも踏まえて考えることを伝えた。また、同じ和歌や歌集を選んだ友達や、違う歌集を選んだ友達と交流することで、自分の考えを広げたり深めたりする学習であることを確認した。

②「自分で取り組む」の過程では、①で決めた和歌について調べ、鑑賞文を書かせた。生徒は各自でインターネットや図書資料を使って調べ、ノートや情報カードに整理していった。その際、学校司書の協力を得て、目次や索引の見方、出典の書き方の復習指導を行った。和歌に親しむために音読も重視し、自分が読み方やリズムを覚えるため、友達に紹介するために音声を録音する作業も取り入れた。

③「広げ深める」の過程では、出来上がった鑑賞文を交流し、感想やその時代、その歌への考え方を伝え合う学習活動を実施した。友達と交流することで広がった考えを文章にまとめさせ、和歌や時代が違っても共通する点、相違点に気付かせ、自分の考えと比べる学習過程を重視した。

④「まとめあげる」の過程では、学んだことをまとめ、新たな興味や疑問を引き出させることをねらいとした。単元の最後には身に付いた力について振り返らせた。「考えの形成（読むこと）」や「古典の親しみ方や学習する意味」について身に付けた力を生徒が自覚し、今後に生かすことができるように促した。

ウ ICT活用教育の充実（ちばっ子「学力向上」総合プラン）

検証授業では、知識・技能の確かな習得のために和歌の音読を重視し、歴史的背景に注意して読めるような資料を提供した。生徒が活用する資料は図書資料と、電子資料（インターネット）を併用した。また、作品の提出については授業支援ソフトを活用した。（図2）本単元で授業支援ソフトを使う利点は、①音読の音声を入力できること、②生徒が作成したカードをつなげて一つの作品にできること、③作品を提出し、同時に全員が全員の作品を見ることができること、④自分の座席にいながら作品の交流ができることなどがあげられる。

図2 授業支援ソフトの画面



エ 実態を踏まえた「学習のてびき」の作成

生徒の実態を踏まえ、既習事項や学習の見通しが確認できるような「学習のてびき」を作成した。本単元に必要な「和歌の世界へようこそ（和歌の説明）」（図3）、「鑑賞とは何か（既習事項の確認）」、「作品のイメージをもと（教師見本）」（図4）、「教科書の和歌はどんな意味（現代語訳）」、「鑑賞のことば」のほか、様々な資料を冊子にして提供し、短時間で効果的に学び、作業が進むように工夫した。

図3 「和歌の世界へようこそ（和歌の説明）」

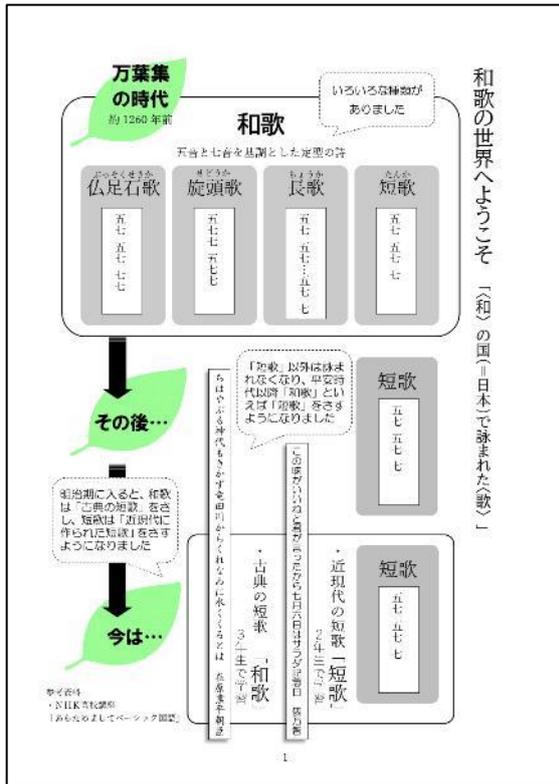


図4 「作品のイメージをもと（教師見本）」

作品のイメージをもと

みのある作品 古今和歌集

夏と秋と行きかた空の霞の間に かくたへ涙しき風や吹くらむ 凡村内膳 下長海みのある

カード①

自分の名前

角数

作者

背景（趣意）

カード②

現代語訳

和歌の意味

カード③漢語文

古今和歌集の時代、空には天上世界など雲霧間への行き来をする通路があると考えられていた。作者は「空の上は、どうなっているのだろうか。夏と秋の境目の区別は、涼しい風が吹いているのだろうか」と疑問をふくらませているのだと思う。当時は人工衛星もなく、今のような天気予報もなかったから、季節はどのようにやって移り変わるのか不思議だったに違いない。

「涼しき風や吹くらむ（吹いているのだろうか）」と表現していることから、空の上の様子を想像していることと、また涼しい風は吹いていないことがうかがえる。まだまだ暑い日が続いているだろう。「早く秋の涼しい風が吹かないか」と待ちわびている様子も伝わってくる。

この歌は「みな月のつごもりの日よめる」と詠言があり、立秋の前日に詠まれた。現在の立秋は八月上旬。この歌の思いを今と照らし合わせると、涼の上では秋でも暑い日が続くので、作者もまだ暑い風とは思っているから秋の訪れを待っているのだと思う。当時は今よりは涼しかったと思うが、涼しさを確かなのは共感できる。

カード④

1 鑑賞文 300字～400字程度

カード⑤

1 表書き資料 (署名、期日)

オ 学習の記録（主体的に学習に取り組む態度）の工夫

見通しをもつ段階、学びを調整する段階、学習を振り返る段階で、個人の学習状況を記入させた。（図5）「主体的に学習に取り組む態度」は粘り強い取組を行おうとする側面と、自らの学習を調整しようとする側面を評価することが求められている。本単元全体のめあてや、この段階で何を書いてほしいかを示すことで、生徒自身も的確に学習を振り返ることができ、教師も「粘り強い取組や学習を調整する態度」を見ることができると考えた。本単元では「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の①見いだす、②自分で取り組む、③広げ深める、④まとめあげる の4つの過程のうち、①を1時間目に、②を4時間目に、④を6時間目に書かせて評価を行った。③では「読むこと」の評価を行った。

カ その他の実践

国語科では、先に示した検証授業のほか、以下の授業実践を行った。

○「平家物語 ～平家の武士像に迫る～」(2学年)

生徒がもつ武士のイメージと、平家物語に書かれている武士から想像できる姿を比べて、平安時代の変革期における、社会や人間の姿について考える学習活動を設定した。また、その姿から現代につながっていることや、学ぶべき事柄を考えさせた。

①「見いだす」の過程では、学習支援ソフトを用いて、生徒自身がもつ武士のイメージを明らかにさせた。見た目や生活だけでなく、心得など、精神的な部分も調べさせることを指示した。また、KJ法を用いてグルーピングすることで、調べたことを整理し、イメージをつかみやすくした。まとめたものを学習支援ソフトのカードに文章として表した。その後、「平家物語」の冒頭部分と、「敦盛の最期」を読み、独特なリズムを感じ、古典に親しみをもたせるとともに、内容の理解を図った。

②「自分で取り組む」の過程では、①で読んだ平家物語や、教師が選んだ「敦盛の最期」以外の作品をもとに、平家についての武士像を授業支援ソフトのカードにまとめさせた。その際に、①の過程と同様に、図書資料やインターネットを用いて、情報を得ることとした。

③「広げ深める」の過程では、②で得られた情報をグループで共有し、平家の武士像についての考えを深めさせるようにした。その際も、KJ法を用いて、挙げた情報をわかりやすくまとめさせた。

④「まとめあげる」の過程では、学んだことをまとめ、新たな興味や関心を引き出させるようにした。まとめた内容と、導入部分で考えた武士のイメージを照らし合わせることで、生徒がもつイメージと、平家の武士とで共通していることや、違うことをまとめさせた。その上で、筆者が伝えたいことや、時代の変革期における社会の在り方や人々の生き方についても考えさせた。

○メディアと表現「全ては編集されている」、『写真で「事実」を表現する』（1学年）

様々なメディアにおいて「編集」が行われていることを認識したうえで、必要な情報の読み取りや、生徒自身が情報を発信する際の表現の仕方について考えさせる学習活動を行った。考えを深めるために、1つの出来事について書かれた複数のメディアを提示し、比較、検討させる。教科書本文の内容に加えて、実際の出来事について取り上げられたものがどのような視点で、どのような工夫がされて、どのように書かれているのかを比較させた。

①「見いだす」の過程では、教科書の本文の内容を理解させた。「メディア」「編集」といった語句について調べさせ、学習する対象を明確にした。本文では、筆者がメディアに対して注意喚起を行っている。生徒はスマートフォンやタブレットが身近な存在であるため、メディアそのものへの理解を深め、自身の体験につなぎ合わせて考えさせた。

②「自分で取り組む」の過程では一つの出来事に関する記事や映像を見比べて、それぞれの特徴や伝え方について考えさせた。夏休みに校外学習の調べ学習で作成したプレゼンテーションソフトを修正しながら、伝えたいことを表現できているか検討した。

③「広げ深める」の過程では、作成した画像をグループで共有し、お互いにコメントを書いた。3～4人でグループとなり、作成した資料を見せながら自分の考えや工夫した点を説明させた。

④「まとめあげる」の過程では、自分の作品について振り返るとともに、単元全体の振り返りを行った。説明文を読み、伝えたい内容を、プレゼンテーションソフトを用いて話す学習を通して、日常から様々なメディアに積極的に触れて、適切な言葉を選んだり、複数のメディアを見比べたりといった、情報を活用し考えることができるきっかけとなるように促した。

(3) 加配教員の活用

- ・授業中における生徒への学習支援
- ・個々のつまづきに対する指導・助言

3 研究の成果

○「授業づくり」に特化した校内研修会を実施することにより、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムへの理解が深まり、全教科で授業づくりの工夫がなされた。学校全体で効果的な授業づくりについて検討できる環境が整った。研修会後も教科を超えて授業を参観する雰囲気がつくられている。

○国語科による検証授業の実践により、ICTや図書資料を活用した授業づくりが活性化した。また、国語科の教材研究としての教師見本づくりも積極的に行われるようになった。教師見本は、教材研究だけでなく生徒が学習の見通しをもつためにも必要であり、そのことについても教科部会で共通認識を持つことができた。

○ICT活用教育の充実により、個々の生徒の理解度を把握しながら授業を進め、知識・技能の定着を促すことができた。また、作品の見直しや書き直しが容易にでき、生徒が円滑に学習を進めることができた。さらに和歌の音読を録音し、提出させることで音読指導、評価に役立った。

○実態を踏まえた「学習のてびき」の作成により、短時間で効果的に授業を進められた。教科書以外の和歌(百人一首など)からも選んでよいこと、鑑賞のための語彙を提示したことにより生徒が意欲的に活動し、学習への理解が円滑に行われた。

○学習の記録(主体的に学習に取り組む態度)の工夫により、生徒の学習状況や変容が把握でき、個々に必要な支援、指導がしやすくなった。もっと調べたい生徒にはより詳しい資料を提供し、つまづいている生徒には、個別に声をかけて支援することができた。(図5)

4 今後の課題

○一つの資料を書き写すのではなく、複数の資料から情報を得て考えをまとめることは繰り返し行い、身に付けさせる必要がある。

○現在も行っている、自分の考えを少人数で話し合う活動を、今後も様々な教科領域で展開させたい。

○国語科におけるICTの指導の在り方、より効果的な取り入れ方を検証していく。

○生徒の実態と教師のねらいを合わせた、よりよいてびきの在り方についてさらに工夫をしていく。

図5 学習の記録(生徒)

学習の記録「はじめ」1時間目

和歌を鑑賞するには、短歌と同じように鑑賞することも必要だが、新たに必要ながいくつかあると学んだ。昔と今は違う部分があるが同じ部分もあるので、比較して和歌を味わいたい。和歌の鑑賞を学習することで、昔の人の感じ方を知ることができ、今は違った新しい見方を見付けられると思う。

学習の記録「なか」4時間目

今日までの学習を通して、和歌は単なる31音ではなく作者の思いや感じた情景を最大限に引き出した、ものすごく密度の大きい31音だと思った。たったの31音で思いを表現し、広大な想像を膨らませられ、ストーリーができてあがる、この流れは、日本語を使う我々日本人にしかできないことだと思った。

昔は今と違って先のことが見えない不安があったり、未知の場所へ足を踏み入れる怖さがあったり、今よりも多くの感情が生まれていたのではないかと感じた。だから、感性が豊かであらゆるものごとに興味をもっていたのではと考えた。

学習の記録「おわり」6時間目

掛詞を習って、和歌でいう掛詞と今でいうダジャレは似ていると感じた。当時、掛詞を用いた歌を詠める人はモテていたと聞いたことがあった。現代ではダジャレを言っている人は冷めた印象を受けしまうのは、今と昔の違いの一つだと思った。そのジェネレーションギャップが少し面白く感じた。和歌の鑑賞を学習して、学習前は昔の人の感じ方を通して今は違った斬新な新しい見方を見付けられると思っていたが、案外現代でも同じような感じ方が多く共感できるものがいくつもあった。現代にも通ずる、自然への考え方や、人間の感じ方を、和歌を通して学ぶことができたと思う。古典を学習することは昔と今の相違点を見付けられ、現代の暮らしをより良いものにするのに役立つと思う。さらに未来を持続的にさせるためにも昔の考え方は必要であり、その一つとして古典は重要なものだと考える。